

小丸川源流ルネッサンス

一生き残りをかけた源流の村の復興運動―

梶尾ルネッサンス103 世話人代表 黒木 勝実

はじめに

椎葉村は源平の昔、壇ノ浦合戦に敗れた平家の落人が隠れ棲んだといわれている平家落人の村として、又民謡「ひえつき節」のふるさととして、更には現代農業のルーツである焼き畑農業が今もって息づいている村として有名である。



今も続いている焼き畑農業

椎葉村は宮崎県の西北部、九州中央山地のど真ん中、かつては西日本の四大秘境（奈良県十津川村、徳島県東祖谷山村、熊本県五家荘と椎葉村）と呼ばれた辺境の地に在って、536.2km²、人口3,600人の山村である。

宮崎県には五大河川が県境から太平洋に注いでいるが、その内、三大河川が椎葉村を源としている。その一つが小丸川で源流一帯が私達の梶尾地区である。かつては91世帯523人もいた人口は現在29世帯57人まで激減し、村内トップランナーの過疎の集落である。その梶尾地区の生き残りをかけた「小丸川源流ルネッサンス運動」を紹介する。

辺境の超過疎の村

梶尾地区は村の中心部から標高1,185mの中山峠を隔てて25kmの辺境の地にある。

公共施設といえば小学校と郵便局があるだけで、

村の中心部とを結ぶ公共交通機関もない。

地区の生業といえば椎茸栽培と和牛生産、それと猫の額ほどの田畑があるだけで産業と呼べるこれといったものはない。現金収入の方途は年金や農業の合間に土木工事や山林労務に出役することからうじて調達しているのが実情である。

わが国の高度経済成長が進む中で過疎化の猛威にさらされ、集落を維持していくのも困難な状況に置かれているが悲愴なまでの決意で墳墓の地を守り抜こうと懸命の努力が続けられている。過疎だけではない高齢化率も63%と極限に近く、村の32%をはるかに上回り更に上昇中である。独り暮らしの老人も9世帯、後継者がいない世帯も3/4を超え、過疎・高齢化の進行は異常なまで加速しつつありその極限に達している。

ピンチはチャンス

この様な厳しい環境の中、更に追い討ちをかけるような出来事が起こった。小学校の休校（事実上の閉校）である。明治7年に創設された梶尾小学校は昭和35年102人をピークに年々減少の一途を辿り、平成5年には遂に2人だけの在校生となり、その2人も13km離れた隣村の学校に通うことになった。区民総会が開かれ断腸の思いで休校の決断が下された。かくして118年の長い歴史と伝統に輝く学校の灯は消えた。

地域の学校は単に教育の場であるだけでなく、地域のシンボルでありコミュニティーの場である。学校がなくなるということは地域にとって全身衰弱が一段と進化するということに外ならない。世界に類例をみない日本経済の高度成長の矛盾をモロに受けた形で103人の唯一のより所であった学校はあえなくもついえ去った。

「国栄えて山河滅ぶ」といっては言い過ぎであろうか。全国にはこのような全身衰弱の町村が国の

小丸川源流ルネッサンス —生き残りをかけた源流の村の復興運動—

梶尾ルネッサンス103 世話人代表 黒木 勝実



廃校になった梶尾小学校

経済の肥大化に反比例して進行していると見てよいのではないか、とは言っても地方の疲弊を政治の貧困のせいと決めつけるだけでは何も問題の解決にはならない。

激動の中の地域おこしは自ら出来ることは何かということから始めなければならない。生き残りをかけた地区民の話し合いが幾度ももたれた。将しくピンチはチャンスだ。梶尾小学校閉鎖を地区再出発の日としよう。他に依存してきた姿勢を改め自分たちで出来ることは自分たちで実践しようということが確認された。

まず風土の耕し直しから

地域の自立を旗印に掲げた地域おこし運動は、まずは地域に残っている宝物探しから始まり続いて風土の耕し直しから手がけていった。発掘した資源や歴史、文化等を現代社会の中で活用し直すことである。

地域の宝として普段は気に止めていない小丸川源流がある、しかも当時建設省が九州一の清流と折紙付きの川である、ヤマメの豊庫でもある、又ホテルも戻ってきた。それに国指定の無形民俗文化財の梶尾神楽がある、加えて山菜は山ほどある、そしてこれ等を扱いこなす人材もいる。お膳立ては揃った。



民俗文化財の梶尾神楽

小丸川源流まつり

公民館主催の小丸川源流まつりの出発である。会場は河川敷での合歓の花が満開の樹間にしつらえた特設の舞台は日本一の晴れ舞台が出来上がる。次いで地区民総出で河川流域の清掃、釣り堀りや魚掴み取りの池が急ごしらえで準備された。PRは村民向けは電話回線を使つてのオフトークで全戸洩れなく周知、小丸川流域の町村には小丸川水質汚濁防止協議会が中心になって呼びかけ、源流まつり当日は地区民の10倍を超える800人が処々方々から参集した。セレモニーに続いてヤマメ釣り大会、魚掴み取り、舞台では神楽の舞い、源流太鼓、ミュージックベル、民謡、飛び入りの演芸の出し物が披露され源流まつりは最高潮、後半は野営バーベキュー、焼き肉の臭いと煙が立ちこめる中、ノミネーションで心ゆくまで交流が深められた。

用意された地場即売品は朴葉で包んだキビ団子、竹の皮で巻いたアク巻き、梅干漬け、茶、カライモ餅、乾椎茸、マタタビの焼酎漬けなど売り切れ御免

が続出、初回にしては大成功を納めることができた。

以来途絶えることなく続けられ今年で12回を迎える。



合歓の花の下で小丸川源流まつり

女性太鼓と103の発行

こうした交流に特に女性の目の色が変わった特筆される二例を紹介する。

(1) 女性10名による太鼓グループの出現である。

その名も「源流太鼓」平均年齢56才（当時46才）、レパートリーは10指に満たないが中でも神楽のリズムを採り入れた「厳流」は得意中の得意である。村内唯一の太鼓（現在は2グループ）グループということもあって村内外から出演依頼が多く断るのに一苦労とか。



女性だけの源流太鼓

(2) ミニコミ紙「梅尾ルネッサンス103」の発行である。

心のより所であった学校の閉校、これに変わるものとして「故郷を守り抜こう」という地区民の心を一つにする何か欲しい、その結果生まれたのがこの情報誌である。

名前を公募したところ多数の応募の中から「今どん底の103人ふるさと梅尾の復興をめざし前進しよう」との願いを込めて名付けられた。極限状態にある区民の開き直りの第一歩であった。

紙面作りは3人の女性の編集委員にすべてを任せられたが手作りの温もりとユニークさに加え顔の見えるふるさと情報誌として、又梅尾に縁のある人々との交流の場として大変好評を博し、毎月発



手作りのミニコミ紙梅尾ルネッサンス103

小丸川源流ルネッサンス —生き残りをかけた源流の村の復興運動—

梶尾ルネッサンス103 世話人代表 黒木 勝実

行し昨年100号を迎えた。

この情報誌が朝日新聞の知れるところとなり全国に辺地での活躍ぶりが紹介され、ファンは全国に広がり、中には梶尾に移住したいという熱い人まで出てきて一時対応に苦勞するハプニングまで起きた。手書きで発行してきた「梶尾ルネッサンス103」も87号からパソコン導入となり写真入りでカラフルになり一層親しみやすいものとなった。

その後の梶尾

閉校した後の小学校は昨年独り暮らし老人共同住宅「梶尾の館」として生まれ変わった。又、昨年6月には村の中心まで峠超えの悪路1時間が新しく神話



福祉施設に生まれ変わった旧梶尾小学校



悲願の中山トンネル開通

街道としてトンネルが開通し、30分で通行が可能となり陸の孤島返上となった。

まとめ

小丸川ルネッサンス運動を通して得たものは数え切れない程あるがその一部を列挙する。

- (1) 一衣帯水の流域住民が清流を守ろうと一体感が高まり、その核となる小丸川源流まつりを通じて連帯と交流の輪が広がった。
- (2) 村内各地区の地域づくり運動に火を点けることにつながった。
- (3) 地区住民が心の過疎から脱却することができた。
- (4) 「梶尾ルネッサンス103」の発行は地区民を勇気づけ外部の人と絆が強くなった。
- (5) モノ作りの楽しみができ生き甲斐を見いだした。
- (6) 村内初の女性太鼓グループが出現した。
- (7) 県の河川課が水辺整備していただいた。
- (8) 村がホタルの養殖場を整備、他財政援助していただいた。
- (9) 朝日新聞の「天声人語」で地域おこし運動が紹介され、大きな反響を呼んだ。



生き残りをかけた梶尾ルネッサンス運動が紹介された天声人語

今梶尾地区は63%の超高齢化社会の中にあって厳しさは増すばかりだが、この受賞を機に更に過疎を逆手にとって崖っぷちの強さを発揮し、「明けない夜はない」ことを信じ、区民一同さらなる挑戦を続けて参りたい。